新見公立短期大学紀要　第26巻
pp. 71－80, 2005

原　著

小児看護学の教育方法に関する研究(2)
—社会資源の単元の授業評価—

上山　和子*

看護学科

(2005年11月9日受理)

本研究は、小児看護学Ⅰの授業における一単元として子どもの育成に関する社会資源を設定し、2003年度より事例の活用、2005年度は発表形式を変更した。そして、両年度の年度別による授業評価について検討した。その結果、社会資源の理解、担当項目以外の他の項目への関心は高まったが、事例は十分活用されていなかった。また、発表形式としては視覚資料を用いた方法が効果的であることが示唆された。今後は、学生の関心度を踏まえ、将来身近な制度として社会資源を活用できるように意識を高める教育方法の検討が必要である。

(キーワード) 小児看護学、社会資源、教育方法、授業評価

はじめに

小児看護学のカリキュラムについては、少子化などの社会環境の変化を踏まえ教育内容が検討されている。先行研究をみると実習について飯村ら[1]の看護系大学の実習概要の調査では、実習目標のなかから重要視しているものとして、「発達段階に応じた援助」「成長発達の理解」「病態生理の理解・援助」「安全・安楽を考慮した援助」「子どもと家族の理解」を取り上げ、子どもの成長発達の理解を踏まえ、家族も含めた援助に焦点を当てている。

講義では、小児看護学の項目として看護基礎教育における看護技術および認知領域面の教育のあり方に関する研究[2]で、教育単位の内容として①小児看護の理念②権利庇護③成長発達に関する援助④生活の援助⑤健康課題に関する援助⑥家族援助⑦環境に関する援助⑧支援関係形成⑨小児ケアシステムに関する援助⑩子ども・家族の看護過程の展開の10項目を取り上げ、小児看護の目標から社会支援システムまで幅広く学修するように構成している。また、貝瀬ら[3]は小児看護学の講義で、子どもをめぐる法律と政策の単元に具体的な事例を用いた学習法について取り上げ、子どもをめぐる制度の理解に焦点を当てている。

筆者は、以上のような先行研究を踏まえ、小児看護学Ⅰ講義の中で小児看護と社会資源に関わる単元の一つとして「子どもの育成に関する社会資源」を設け、学生が自主的に学習する方法としてグループワークを取り入れた。そのグループワークによる授業方法について検証の結果、効果的との評価であった。しかし、一層の社会資源の理解を深めるため、授業方法の検討について必要なことが示唆された[4]。

先行研究の前掲⑨では、その内容で小児の社会支援システムへの参画、小児の保健・医療・福祉・教育との連携を強調している[5]。これらの内容は、今回取り上げた単元「子どもの育成に関する社会資源」に該当している。つまり、小児看護学において社会システムおよび各分野の連携についての学習は重要と考えられる。

そこで、本単元では、子どもの育成に関する保

*連絡先：上山和子　新見公立短期大学　看護学科　718-8585　新見市西方1263-2

健・医療・福祉・教育で今後学生が実習や将来的に関わると思われる事例を紹介して社会資源に視野を広げられるようにグループワークによる発表形式の授業方法の検討を2003年度から試み、2005年度はその発表形式を変更した。

本研究では、その2003年度、2005年度の授業評価を基に事例を用いた効果および発表形式について検証することを目的としている。

1．小児看護学Ⅰの講義概要および子どもの育成に関する社会資源の単元の授業内容

1）小児看護学Ⅰの概要

小児看護学は、1単位30時間で2年次の前期に開講している。

授業目的は、小児が成長・発達過程にあることを学び、小児看護の対象と特徴について理解する。また、小児保健の動向を捉え、ライフサイクルにおける小児期の健康について考え、小児看護の役割を理解することにある。

15回の授業は、大きく科目の目的、小児看護の役割、成長・発達の概念、発達年代別の看護、小児看護の課題に分かれている。

以下に授業計画を示す。

1回：小児看護学の目的・対象・役割
2回：小児医療・小児看護の変遷
3回：小児看護における倫理および課題
4回：小児をめぐる諸統計
5回：小児の成長・発達
6回：小児の成長・発達
7回：新生児・乳児期の健康と看護
8回：新生児・乳児期の健康と看護
9回：幼児期の健康と看護
10回：学童期・思春期の健康と看護
11回：小児と家族および社会
12回：小児看護と社会資源
13回：小児看護と社会資源
14回：小児看護と社会資源
15回：小児看護と社会資源

2）子どもの育成に関する社会資源の単元

ねらい：「子どもの育成に関連する社会資源(種々の制度)」について保健・医療・福祉・教育の側面から捉え、看護の役割について考える。

1回目：①子どもの育成に直接関係する政策について概要を講義する。②次にグループワークについて提示する。子どもの育成過程における社会資源の活用に保健・医療・福祉・教育の4つの観点から取り上げる。また、その社会資源と関連する法律を発表内容に盛り込むことを要件とする。さらに具体的に行われている内容を紹介することなどを説明する。

各グループは、保健は学校保健・乳幼児保健、医療は小児慢性特定疾患制度、乳幼児医療費公費負担補助制度（以下、乳幼児医療費負担制度とする)、低出生体重児（養育医療)、福祉は保育所、障害児福祉施設、教育は院内学級の8グループである。

③まとめ方や用いる資料の情報について説明する。

④発表時間や方法について説明する。

⑤状況が分かる程度の事例を設定した。事例の内容は、対象年齢および制度内容、具体的な状況が含まれている簡単な事例とし、その他の内容については各グループで状況設定を追加するようにした（表1)。

2回目：それぞれの担当項目の内容を検討してまとめる。

3回目：担当項目についてまとめた内容を紹介し(発表時間10分、質疑応答5分)、全体討議15分でまとめ15分をする。

（1）2003年度の取り組みの特徴

前回検討した内容を含め、簡単な事例を用い、発表方法は、視覚的な方法（実物投影機）を用いた発表形式とする。

（2）2005年度の取り組みの特徴

2003年度と同じように事例を用い、学生の手元にグループ別の資料を配布する。発表は、手元の資料および視覚な方法（実物投影機）を用いた発表形式とし、発表時間を2コマとして質疑応答が十分行えるようにする。

2．研究目的

「子どもの育成に関する社会資源の単元」につ

表1　事例

保健	学校保健	８歳のＡさんは小学校３年生で、４月中旬に学校で健康診断を受けるため、学校から検便の容器をもらって帰った。最近ゲームをよくしており、あまり外遊びは好きではない。甘いものも良く食べる。
	乳幼児健診	３ヵ月のＢちゃんは、母乳栄養で現在少しずつ追視がみられるようになった。Ｓ病院の小児科外来で生後２回目の乳幼児健診を受け、予防接種について説明を受けた。
医療	小児慢性特定疾患制度	４歳児のＣちゃんは、体温 37.5℃で左膝関節痛を訴え、Ｓ病院小児科外来を受診し、そのまま精査目的で入院となった。精密検査の結果、急性リンパ性白血病と診断され治療が開始となった。
	乳幼児医療費公費負担補助制度	３歳児のＥちゃんは、発熱、咳、鼻汁がみられＳ病院の小児科外来を受診し、診察・レントゲン検査を受けた後に内服剤が処方となり、水分摂取の方法・内服方法の説明を受け帰宅した。３日後に再度外来を受診する予定である。
	低出生体重児（養育医療）	Ｆちゃんは、Ｓ病院で 28 週 1150g で出生し、直ちにＮＩＣＵ（新生児集中治療室）に収容された。母親は、同じ病院の産科病棟に入院し、母乳を搾乳して持ってきている。また、一部は母乳パックを利用して冷凍保存している。父親は、名前をつけて出生届けを提出しようと考えている。
福祉	保育所	Ｈちゃんは、もうすぐ１歳の誕生日を迎える、Ｈちゃんの母親は看護師で、仕事への復帰を考えてＳ保育園に行かせるように手続きをした。現在、午前中だけの半日保育で、Ｈちゃんが保育園に慣れるように母親も半日保育園で過ごしている。母親は２～３日様子をもて１日保育に変更しお迎えは父親と交代で行いたいと考えている。
	障害児福祉施設	Ｉちゃん２歳は、片麻痺があり、Ｙ医療センターで治療を受け、Ｔ療育園で訓練を受けている。現在、右下肢の補助具の申請を申し出ている。
教育	院内学級	Ｊちゃんは、小学校４年生です。顔面浮腫、尿量減少に気づきＳ病院の小児科外来を受診し、ネフローゼ症候群と診断され入院となり、内服・食事療法が開始となった。回復期に入り、状態も安定してきたため、Ｓ病院にあるＴ小学校Ｓ分校の授業を受けることになった。

いて事例の導入した2003年度と発表形式を変更した2005年度の授業評価を比較し、今後の教育方法について示唆を得る。

3．研究方法

研究対象：2003・2005年度に小児看護学Ⅰを履修したA短期大学2年次生

研究方法：子どもの育成に関する社会資源の単元の授業終了後に質問紙調査を実施した。調査項目は、前回の調査を基にこの単元への関心度、担当項目への希望度、グループワークへの参加度、グループワークの授業は面白い、授業方法の適切度、社会資源についての理解度、事例を用いることによる理解度、他のグループの発表への関心度、学んだ社会資源の活用度、単元での学習内容である。2005年度は、発表後の単元に対する関心度について質問項目を追加した。

評価方法は、「大いにそう思う」「ややそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の5段階とした。また、他のグループの発表への関心度の評価理由および単元での学びについては自由記載とした。

分析方法：それぞれの項目について集計し、自由記載内容については、内容分析とした。

また、2003年度の事例の効果と2005年度の発表形式の違いについてカイ2乗検定により比較した。そして、2005年度はグループワーク発表前と発表後の単元に対する関心度について比較した。

4．倫理的配慮

成績には関係ないこと、研究以外には使用しないことを文章および口頭で説明し、同意が得られた場合に提出してもらうようにした。

5．結果

質問紙は、単元の最終授業に出席した学生に配布した。2003年度は出席者71名中66名より回収した。回収率は93.0%で、有効回答率は100%であった。また、2005年度は、64名中53名より回収した。回収率は82.8%で、有効回答率は100%であった。

1）各質問項目の結果

（1）単元への関心度（図1）

単元に対する関心では、2003年度は大いにそう思う1.5%、ややそう思う42.4%、どちらとも言えない31.9%、あまりそう思わない21.2%、全くそう思わない3.0%であった。大いにそう思うとそう思うの肯定的評価（以下、肯定的評価とする）は約4割であった。2005年度は大いにそう思う7.5%、ややそう思う45.3%、どちらとも言えない26.4%、あまりそう思わない17.0%、全くそう思わない3.8%で肯定的評価は約5割であった。

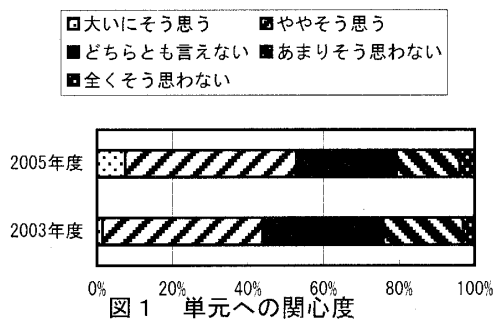

図1　単元への関心度

（2）担当項目への希望度（図2）

グループワークの担当項目への希望度では、2003年度は大いにそう思う6.1%、そう思う25.7%、どちらとも言えない56.1%、あまりそう思わない10.6%、全くそう思わない1.5%で肯定的評価は約3割であった。2005年度は、そう思う28.3%、どちらとも言えない49.1%、あまりそう思わない20.8%、全くそう思わない1.8%で肯定的評価は約3

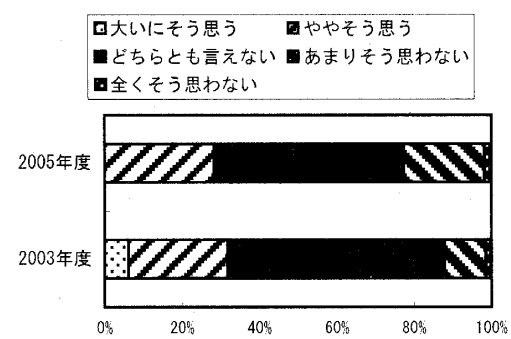

図2　担当項目への希望度

割弱であった。

（3）グループワークへの参加度（図3）

グループワークへの参加度では、2003年度は大いにそう思う25.8%、ややそう思う50.0%、どちらとも言えない19.7%、あまりそう思わない4.5%で肯定的評価は約7割であった。2005年度は大いにそう思う24.5%、そう思う39.6%、どちらとも言えない34.0%、全くそう思わない1.9%で肯定的評価は約6割であった。

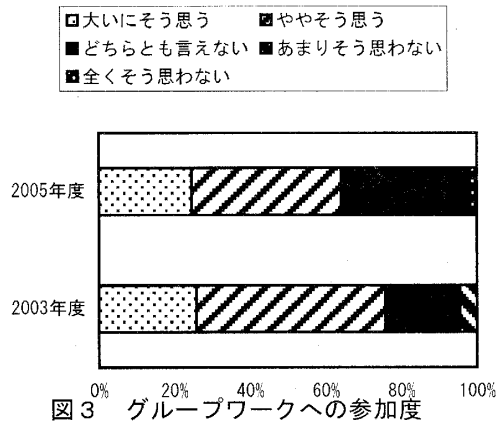

図3　グループワークへの参加度

（4）グループワークの授業は面白い（図4）

グループワークをとおしての授業は面白いでは、2003年度は大いにそう思う19.7%、ややそう思う34.8%、どちらとも言えない38.1%、あまりそう思わない12.1%、全くそう思わない1.5%で肯定的評価は約5割であった。2005年度は大いにそう思う13.2%、ややそう思う54.7%、どちらとも言えない24.5%、あまりそう思わない7.6%で肯定的評価は約6割であった。

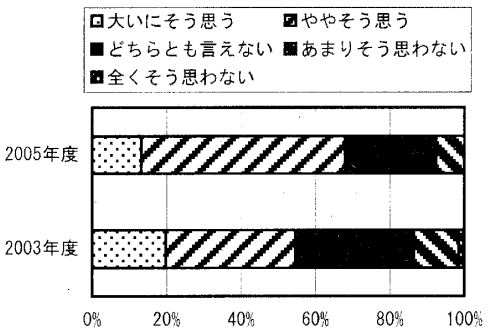

図4　グループワークの授業は面白い

（5）授業方法の適切度（図5）

授業方法は適切であるかでは、2003年度は大いにそう思う22.7%、ややそう思う42.4%、どちらとも言えない27.3%、あまりそう思わない7.6%で肯定的評価は約6割であった。2005年度は大いにそう思う18.9%、ややそうそう思う39.6%、どちらとも言えない32.1%、あまりそう思わない9.4%で肯定的評価は6割弱であった。

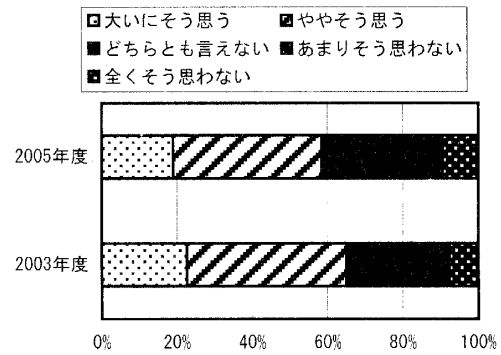

図5　授業方法の適切度

（6）社会資源についての理解度（図6）

自己評価による社会資源についての理解では、2003年度は大いにそう思う1.5%、ややそう思う47.0%、どちらとも言えない31.8%、あまりそう思わない19.7%で肯定的評価は約5割弱であった。2005年度は多いにそう思う11.3%、ややそう思う62.3%、どちらとも言えない20.7%、あまりそう思わない5.7%で肯定的評価は約7割であった。

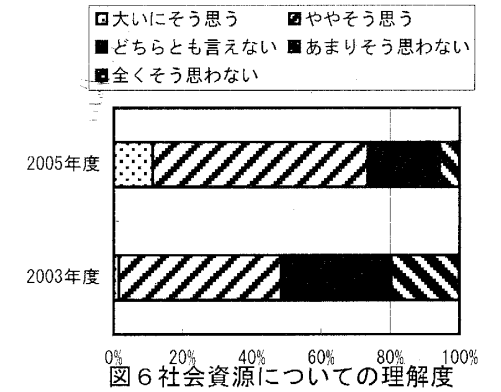

図6社会資源についての理解度

（7）事例を用いることによる理解度（図7）

事例を用いることによる理解では、2003年度は大いにそう思う12.1%、ややそう思う47.0%、どちらとも言えない24.3%、あまりそう思わない15.1%、全くそう思わない1.5%で肯定的評価は6

割弱であった。2005年度は大いにそう思う13.2%、ややそう思う54.7%、どちらとも言えない26.4%、あまりそう思わない5.7%で肯定的評価は6割強であった。

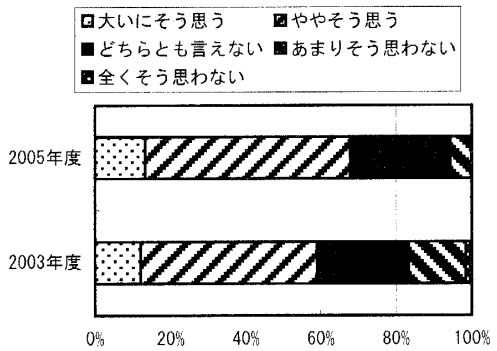

図７事例を用いることによる理解度

（８）他のグループの発表への関心度（図８）

他のグループの発表への関心では、２003年度は大いにそう思う21.2%、ややそう思う50.0%どちらとも言えない25.8%、あまりそう思わない25.8%、全くそう思わない3.0%で肯定的評価は約7割であった。2005年度は大いにそう思う28.3%、ややそう思う60.4%、どちらとも言えない11.3%で肯定的評価は、９割弱であった。

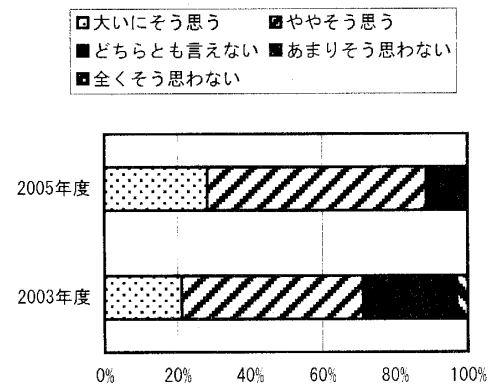

図８他のグループの発表への関心度

（９）2005年度のグループワーク発表後の単元への関心度（図９）

子どもの育成に関する社会資源の単元への関心度は、グループワークの発表・全体討議後では、大いにそう思う13.2%、ややそう思う56.6%、どちらとも言えない26.4%、あまりそう思わない3.8%であった。肯定的評価は発表前では約５割で、発表後は７割弱であった。

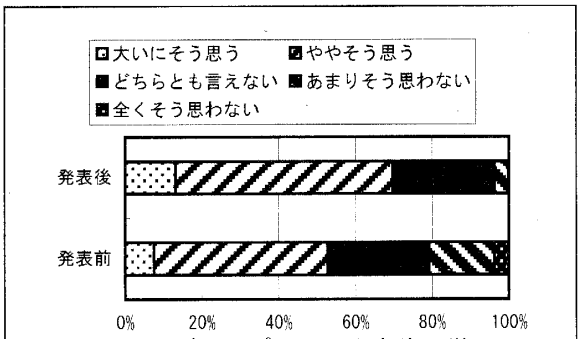

図９グループワーク発表後の単元への関心度

２）年度別の比較

教育方法の違いによる年度別の比較では、社会資源についての理解度で2003年度に比べ2005年度が高く有意差がみられた $p=0.008$（$p<.05$）。

３）どのグループの発表に関心があったか（図

表２　発表項目に関心があった理由

２００３年度			２００５年度		
カテゴリー	コード	件数（45件）	カテゴリー	コード	件数（23件）
発表方法の工夫	具体的で分かりやすい	６件（13.3%）	発表方法の工夫	具体的で分かりやすい	５件(21.7%)
発表項目への関心度	入院している児の学習に関心があった	22件（48.9%）	発表項目への関心度	入院している児の学習に関心があった	３件(13.1%)
	障害児に関心があった	３件（6.7%）		低出生体重児に関心があった	７件(30.5%)
	低出生体重児に関心があった	３件（6.7%）		養護教諭に関心があった	１件(4.3%)
	慢性特定疾患に関心があった	４件（8.9%）		乳幼児に関心があった	１件(4.3%)
	養護教諭に関心があった	１件(2.2%)	自己の将来像	自分の将来に役立つ	４件(17.4%)
自己の将来像	自分の将来に役立つ	４件（8.9%）		身近な制度だから	２件(8.7%)
	身近な制度だから	２件（4.4%）			

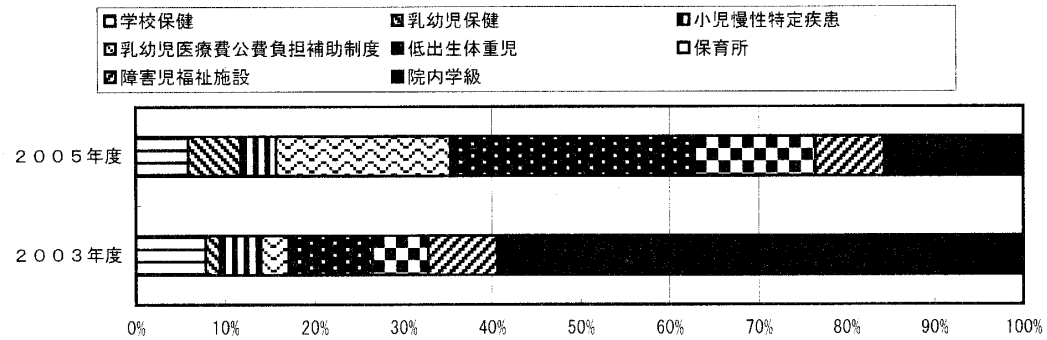

図10　どの項目の発表に関心があったか

10・表２）

2003年度は、院内学級が最も多く38件（59.4%）、低出生体重児（養育医療）６件（9.4%）で、2001年度と同じ結果であった。理由として、『具体的で分かりやすかった』６件、『入院している児の学習に関心があったから』22件などであった。

2005年度は、低出生体重児（養育医療）14件（27.5%）で最も多く、次いで乳幼児医療費負担制度10件（19.6%）、院内学級８件（15.7%）、保育所７件（27.5%）であった。理由として『具体的で分かりやすかった』５件、『低出生体重児に関心があった』７件、『自分の将来に役立つと思ったから』４件などであった。

４）社会資源の活用（複数回答　図11）

2003年度は、事例として必要になったときに活用するが最も多く44件で、次いで親になった時40件、相談28件、周囲に知らせる６件、その他１件（0.9%）であった。

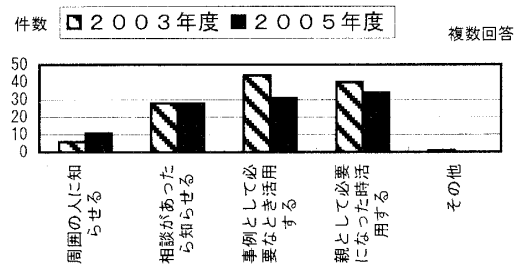

図11　社会資源の活用方法

2005年度は、親になった時に活用するが最も多く34件、次いで事例として必要になった時31件、相談28件、周囲に知らせる11件であった。

５）単元を通して学習した内容（表３）

2003年度は、38件抽出し、「制度の理解」「グループワークを通しての理解」「学んだ学習の活用」の３カテゴリー、2005年度は、24件抽出し、「制度の理解」「グループワークを通しての理解」「学んだ学習の活用」「社会状況の理解」の４カテゴリーに分類された。

内訳として2003年度は『子どもをとりまく環境の中で、色々な制度を知ることができた』24件、『グループワークを通して実際に調べることにより理解が深まった』４件、『院内学級の具体的な生活を知ることができた』４件、『保育所の内容を知ることができた』などであった。2005年度は、『子どものための色々な制度を知ることができた』15件、『グループワークを通して実際に調べることにより理解が深まった』５件、『相談を受けた時にグループワークの資料が使える』１件などであった。

６．考察

１）調査結果

（１）各質問項目の肯定度

全項目において肯定度が高かったのは、2003年度、2005年度とも他のグループの発表への関心度であ

表3　子どもの育成に関する社会資源の単元を通しての学習内容

２００３年度			２００５年度		
カテゴリー	コード	件数（38件）	カテゴリー	コード	件数（24件）
制度の理解	色々な制度を知ることができた	24件(63.1%)	制度の理解	色々な制度を知ることができた	15件(62.4%)
グループワークを通しての理解	グループワークを通して実際に調べることにより理解が深まった	4件(10.6%)	グループワークを通しての理解	グループワークを通して実際に調べることにより理解が深まった	5件（20.8%)
学んだ学習の活用	院内学級で学ぶ具体的な生活を知ることができた	4件(10.6%)	学んだ学習の活用	相談を受けた時に資料が利用できる	1件(4.2%)
	保育所の内容を知ることができた	2件（5.3%)		障害児への支援を知ることができた	1件(4.2%)
	養育医療について具体的に知ることができた	1件（2.6%)		将来に役立つことを学んだ	1件(4.2%)
	乳幼児健診の内容を具体的に知ることができた	1件(2.6%)	社会状況の理解	少子化の影響を知った	1件(4.2%)
	慢性特定疾患について具体的に知ることができた	1件(2.&%)			
	将来に役立つことを学んだ	1件(2.6%)			

った。また、低かったのは、2003年度、2005年度とも自分の担当項目への希望度であった。担当の項目を学生の主体性で決定しておらず、教員がグループ分けをしており、自己の関心度と一致していないため低かったと推察される。しかし一方で、自己の関心を持っている項目に対しては関心度が高かったと考えられる。自己の関心度が高いものとして将来像と重ね合わせ考えていることや2001年度の調査時[6]にみられたように他の科目で触れることが少ない項目に対して関心度が高かったと推察される。

2003年度と2005年度の教育方法の違いによる比較では、単元への関心度、事例を用いることによる理解度、グループワークへの参加度、グループワークの授業は面白いでは有意差は見られなかった。社会資源についての理解度は、事例を活用することおよび発表方法の変更により理解度は全体的には高まった。しかしながら、2005年度も肯定的評価は約７割であり、事例は十分に活用されていないことが窺え、学生の理解度を深めるための授業方法の検討が必要と考えられる。グループワーク発表前に比べ発表後約2割は単元に対する関心度が高まっていることを考えると、社会資源の制度を理解するためにより具体的に学ぶ学習形態の検討が必要であろう。

（２）他の項目への関心度および社会資源

他のグループ項目への関心度では、2003年度は、院内学級が最も多く、事例に具体的な写真を取り入れるなど視覚的な発表方法などを取り入れたため分かりやすかったと考える。また、他の項目に比べ、低出生体重児についても他の領域等で学習する機会が少ない項目であったため関心が強かったと思われる。

そして、2003年度、2005年度とも少子化にも関わらず、低出生体重児が増加していることに関心をもち、その疑問から関心度も高かったと考える。2005年度では、シラバスで小児看護の課題に触れ、少子化による問題と関連させて講義を進めていったため、2003年度の比較に比べ、低出生体重児に関心をもつようになったと考える。また、将来的に自分自身が活用する機会が高い保育所も関心が強かったと考える。

社会資源の活用では、2001年度[7]と同様の結果を示しており、学生は実際の職業と照らし合わせて活用を考えたと推察される。

（３）単元を通して学習した内容

2003年度・2005年度とも『子どもをとりまく環境の中で色々な制度を知ることができた』が最も多く、2001年度と同様の結果であった。2003年度では、『院内学級について具体的な生活を知ることができた』『新エンゼルプランをとおして保育所の内容を知ることができた』『養育医療について具体的に知ることができた』が多く、2005年度では『将来役に立つことが学べた』『実際調べることで理解が深まった』などがみられた。

2003年度は発表形式の中に、院内学級について

具体的な感想が組み入れられていたため、学びが多かったと考えられる。

2005年度になると事例では、保育所や乳幼児医療費負担制度など将来活用する割合が高い制度に関心を持ち、自己の将来の具体的なイメージと重ねていたためと学びも多かったと考えられる。

2）今後の授業方法の検討

2003年度および2005年度の授業評価を分析した結果、事例を導入したが十分活用されていないことが示唆された。2001年度に比べ、社会資源の理解度は高まったが、まだ十分とは言えない。その要因として、制度を検索するのに時間をとられ、事例との関連が十分検討されていないことも要因と考えられる。また、制度自体が身近なものでなく、具体的にイメージすることが中々困難であると考える。その中でも自己の将来像に近い保育所の事例は、イメージしやすかったと考える。そのため、関心が強かったと考えられる。

このことより、より身近に考えられる事例内容の検討が今後も必要と考えられる。そして、発表方法として手元の資料と視覚資料を用いての提示方法が効果的と考えられる。

今後の課題としては事例の活用と視覚資料についての検討が必要と言える。中林ら（2002）[8]は「学生がイメージすることができるために事前準備の中に事例展開を多く取り入れ活用することが必要」と述べているように事例提示を授業の早い段階に導入することも必要であろう。

先行研究の取り組みで、学生自身が決定するグループ分けも検討したが、片寄る傾向が強いため導入せずに2003年度・2005年度とも教員側がグループ分けを行った。しかしながら学生の学習意欲を引き出す方法として学生の意向を尊重したグループ分けを進めることも重要であり、グループ討議をするのに必要な６人～８人で編成を試み、人数を調整することも検討していきたい。

以上のことより、小児看護学Ｉの「子どもの育成に関する社会資源」の単元の2003年度、2005年度の授業では、事例を活用したグループワークによる発表形式が学生の興味関心を惹きつけ効果的であった。このことは、学生が自ら検索しグループダイナミックスを活用して項目をまとめるため主体的に学べているためと考えられる。さらに事例を早い段階から導入し、その活用方法を工夫することが今後の改善点と言える。つまり、単元へのねらいを踏まえ、講義全体への関心を深めるための準備教育の導入を検討し、より学生の関心度や将来身近な活用制度としての意識が強まる教育方法の検討が必要である。

引用文献

1）飯村直子、伊藤久美、江本リナ他：看護系大学における小児看護学実習の概要、小児看護学会誌、10(2)、16－21、2001

2）平成13年度～平成14年度厚生科学研究費補助金医療技術評価総合研究事業：看護基礎教育における看護技術および認知領域面の教育のあり方に関する研究、日本看護学教育学会誌、13（２）、81－192、2003

3）貝瀬澄子他：調査学習法に事例を用いた授業効果―子どもをめぐる法律と政策の単元を通して－、第30回看護教育論文集、看護協会、９－11、1999

4）上山和子：小児看護学の教育方法に関する研究（１）－授業方法にグループワークを導入した効果と教育上の課題－、新見公立短期大学紀要、23、123－131、2002

5）前掲書２）81－192

6）前掲書４）123－131

7）前掲書４）123－131

8）中林雅子、飛来るり、安田恵美子他：小児看護学実習モデル－実習準備としての演習モデル－、Quality　Nursing、8(9)、76、2002

A Study on Instruction Methods of Pediatric Nursing (2)
－Evaluation of Classes on Social Resources Related to Rearing of Children－

Kazuko UEYAMAI

The Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata Niimi, Okayama 718-8585 Japan

Summary

We introduced case studies in 2003, and changed the presentation style in 2005 in the teaching unit of social resources related to the raising of children in the classes of pediatric nursing, and evaluated their effects by annual comparisons. As a result, understanding of the students concerning social resources and their interest in subjects other than those assigned to them were improved, but the cases were not sufficiently utilized. Concerning the presentation style, methods using visual materials were suggested to be effective. Evaluation of educational methods to enhance the students' understanding of social resources so that they may readily use them as convenient systems in the future is necessary.

Key words: Pediatric Nursing, Social Resources, Instruction Method, Evaluation of Classes